

コロナ禍におけるトレーニング実習の実践と課題 - 大学の授業評価アンケートからの見た対面授業との比較 -

篠原 純司^{1,2}、福本 隆男^{1,3}、名頭 亮太¹

¹九州共立大学スポーツ学部、²九州共立大学大学院スポーツ科学研究科、³脳梗塞リハビリワン

背景: 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) は、前例のない感染爆発として全世界に広がった。この影響により大学で実施される授業の多くがオンラインを活用した遠隔授業となった。しかしながら、コロナ禍での遠隔授業による授業の質について検証した報告は限られており、特にスポーツ系学部の授業に関する知見は得られていない。**実践報告の目的:** K大学スポーツ系学部にて実施されたトレーニング実習において、COVID-19 影響前の 2019 年度授業評価アンケートの結果と、COVID-19 影響後の 2020 年度授業評価アンケートの結果を比較分析することを目的とした。**対象者:** 2019 年度にトレーニング実習を受講し授業評価アンケートに回答した大学生 109 名 (男子 61 名、女子 48 名、回答率 86.51%)、2020 年度にトレーニング実習を受講し授業評価アンケートに回答した大学生 96 名 (男子 56 名、女子 40 名、回答率 88.07%) とした。**測定環境:** 2019 年度は、全ての授業をトレーニングルームにて実施し、授業評価アンケートの回答を得た。2020 年度は、全ての授業をオンデマンド型の遠隔授業にて実施し、授業評価アンケートの回答を得た。**分析方法:** 2019 年度と 2020 年度の授業評価アンケート結果から、特に重要と思われる 6 項目 (1. 出席、2. 意欲、3. 予習・復習、4. 理解度、5. 聞き取りやすさ、6. 満足度) を選択し比較対象とした。対象者は各項目において 5 段階での評価を行った。統計処理は、各比較に対応のない t 検定を行い、有意水準を 5%未満とした。また、各比較の実質的効果の大きさを検証するため Cohen's d を用いた効果量と 95%信頼区間を算出した。**結果:** 出席において、2020 年度は 2019 年度に比べ有意な向上が見られた (2019 年度: 4.67 ± 0.51 , 2020 年度: 4.84 ± 0.44 , $P < 0.05$)。その他、全ての項目において 2020 年度は 2019 年度に比べ有意な低下が見られた。意欲 (2019 年度: 4.74 ± 0.50 , 2020 年度: 4.28 ± 0.64 , $P < 0.05$)、予習・復習 (2019 年度: 3.84 ± 1.26 , 2020 年度: 3.35 ± 0.91 , $P < 0.05$)、理解度 (2019 年度: 4.67 ± 0.61 , 2020 年度: 3.98 ± 0.71 , $P < 0.05$)、聞き取りやすさ (2019 年度: 4.69 ± 0.60 , 2020 年度: 4.25 ± 0.62 , $P < 0.05$)、満足度 (2019 年度: 4.56 ± 0.80 , 2020 年度: 4.11 ± 0.74 , $P < 0.05$)。効果量は、意欲 ($d = -0.81$, CI: 0.51, 1.08) と理解度 ($d = 1.05$, CI: 0.74, 1.33) が大、予習・復習 ($d = 0.44$, CI: 0.16, 0.71)、聞き取りやすさ ($d = 0.72$, CI: 0.43, 0.99)、満足度 ($d = 0.58$, CI: 0.29, 0.85) が中、出席 ($d = -0.36$, CI: -0.63, -0.08) は小であった。**考察:** コロナ禍におけるオンデマンド型遠隔授業によるトレーニング実習では、出席は向上したが、意欲、予習・復習、理解度、聞き取りやすさ、満足度は低下した。また、意欲と理解度についての効果量が大きであったことから、授業の質が著しく低下したことが示唆された。**【現場への提言】** コロナ禍におけるトレーニング実習においては、双方向型での遠隔授業や、感染予防を徹底した上で、対面での実技指導の回を設けるなど、授業の質を落とさない工夫が求められる。